

『Listening Laboratory Standard β 』の 活用実践例

甲斐 順

1. はじめに

令和4年4月1日付で、神奈川県立柏陽高等学校から松陽高等学校に異動・着任し、現在2年生の「コミュニケーション英語Ⅱ」および3年生の「英語表現Ⅱ」を担当しています。

拙稿では、「コミュニケーション英語Ⅱ」で使用している『三訂版 Listening Laboratory Standard β 』（以下『リスラボS ベータ』）について、授業でどう用いているか述べさせていただきます。

2. 『リスラボS ベータ』の構成

数研出版のサイトによると、『リスラボS ベータ』は、「新傾向の問題にも対応！さまざまな音声視聴方法が可能！」と記されています。対応試験については、各ユニットの初めに「共通テスト対策」などと示されていて、一目でわかるので便利です。「写真に合う説明を選ぶ」(Unit 1)からスタートし、「講義を聞き取る」(Unit 20)までの20ユニットで、段階的にリスニング力を伸ばせるように構成されています。

各ユニットの最初のページに設問があり、マーク形式で解答するようになっています。各ユニットおよび裏表紙裏の「学習の記録」のそれぞれに得点を記入できるようになっています。この「学習の記録」には検印欄もついていますので、生徒に提出させて取り組み状況を確認することもできます。

各ユニットの2ページ目には Listening Aid というコーナーがあり、リスニング音声の聞き取りに役立つ表現や聞き取りのポイントなどが記され、そのあとは Listening Aid をふまえた Check 問題が続きます。直後に、ユニットに関連する Vocabulary が記され、最後は Listen again! で仕上げとなっています。Listen again! は、最初のページの設問と同じ音声聞いて、最初の設問とは別の設問に答えるコーナーです。別の設問が用意されている

ことで、同じ音声を異なるポイントに注意して繰り返し聞くことができます。

3. 授業

現任校の「コミュニケーション英語Ⅱ」は2学年に3単位配置されています。1単位(1回)の授業時間は55分です。週3回のうち、2回目に授業がある日に『リスラボS ベータ』を使うようにしています。

授業では CD デッキを教室に持参し、指導用 CD を用いて音声を流します。まず、各ユニットの設問に取り組みさせます。音声を聞く前に、英文等に目を通すように指示します。そして、普通で速度で音声を1度聞かせ、各生徒が解答をマークし終えたところを見計らって、いったん周りの生徒同士で答えを確認させます。答えを確認している様子を見ると、聞こえた内容や聞き取った単語などを言い合って、「答えは〇〇番だと思う」などと和やかに語り合っています。このやり取りの時間は、リスニングで張りつめていた空気が一気に緩みます。

その後、もう1度同じ速度で音声を聞かせますが、机間指導中に生徒が苦勞している様子が見えるときは、事前にヒントを出すときもあります。そして生徒が自分の解答を見直したあと、全体で答え合わせを行います。4択の答え合わせでは、“Who chose No. 1?” “No. 2?” と問いかけ、その都度生徒に挙手させます。“The answer is No. 2.” “The majority is correct.” などと言って、正答を告げます。生徒は答え合わせのあと、得点を当該ページおよび「学習の記録」の得点欄に記入します。1度だけ音声を聞いて解答するリスニング問題が多く見られる中、このようにあえて2度聞かせています。1度聞いただけで内容を理解できる生徒もいれば、2度聞いても理解できない生徒もいるので、少しでも聞き取れる単語が増え、内容理解が深まればよいと願って実施しています。

ここでスクリプトを配付して目で確認させたいところですが、次ページの Listening Aid に進みます。たとえば、Unit 2「近い意味の英文を選ぶ」の Listening Aid では、「音の連結・脱落・同化」について扱っていますが、まずは音声を聞かせたうえで、実際に get out of(ゲッタウタヴ)を発音し、生徒にも発音させました。Unit 8「ワークシートを完成させる」の Listening Aid では、「大きい数字の聞き取り」を扱っていますが、このユニットでは生徒が最初のページの設問に取り組む前に、「10」を黒板に板書して、生徒から“ten”を引き出し、同重要領で「100」、「1,000」、「10,000」、「100,000」、「1,000,000」と、桁数を増やしていきます。さらに「1,000,000,000」「1,000,000,000,000」と増やし、生徒同士で考えさせます。このユニットでは、たまたま bicycle と tricycle が設問で扱われていることもあり、黒板に自転車、三角形、三輪車の絵を描き、生徒から bicycle, triangle, tricycle を引き出し、billion, trillion へとつなげていきました。このように、発音練習を行いながら、生徒の知識を増やすように Listening Aid を活用しています。

Check 問題は Listening Aid の知識を活用する構成となっていますので、音声を1度または2度聞かせます。1度聞かせたあとに、近くの生徒同士で答えを確認させるのは、前述した通りです。やはりここでも「こう言っていた」などのやり取りが活発に行われます。全体での答え合わせのあとは Listen again! に移ります。

Listen again! は空所補充や4択の聞き取り問題となっており、生徒の理解度に応じて、1度しか聞かせずに答え合わせをする場合もありますし、2度聞かせて答え合わせを行うこともあります。いずれの回数にしても、生徒同士の答えの確認を挟みます。

そして、最初のページの設問に関するディクテーションを行います。ディクテーションは、「聞く力、書く力、語彙力、文法能力などを総合的に伸ばし、さらに、言語使用の正確さ(accuracy)を高める効果があると考えられている」(『英語教育用語辞典 第3版』p.83)ことから、各ユニットの最後に、部分ディクテーションの形で実施しています。最初に、2度音声を聞かせたあと、周りの生徒同士で答えを確認させます。書き取りの難しい箇所は、文法知識を活用させたり、ヒントを与えたりして、3度目の

ディクテーションに取り組ませます。答え合わせは、対話の場合は、2名の生徒を指名し音読させ、教員が解答を板書して行っています。モノログの場合は、教員が英文を読んでいき、空所を生徒に答えさせ、板書しています。締めくくりに、ディクテーションした英文音声を確認のために聞かせます。このあと、解説・解答のついたスクリプトを配付し、最初のページの設問を速い速度(Faster Version)で聞かせて終わりです。なお、ディクテーション用のプリントには、トピックに関連する表現などを盛り込んで、生徒の学ぶ意欲を喚起するよう努めています。

ディクテーションまで行くと30分かかることもありますが、英語の音声にたっぷり浸ることで、少しでも生徒の聞く力が伸長することを願っています。

4. 終わりに

定期テストは、学習したユニットに対応する復習テストから出題しています。ディクテーションノートは、各定期テストの実施日に提出させています。生徒はスマートフォンでQRコードを読み取って、ディクテーションに臨んでいます。以前ならば生徒にCDを購入させて実施していたことも、今ではスマートフォン一つでできるようになりました。便利な世の中になったものです。

『リスラボS ベータ』を通じて、リスニング力だけでなく、英語のさまざまな力を伸ばしていく取り組みは今後も続きます。

引用文献

白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(2019).

『英語教育用語辞典 第3版』大修館書店

(神奈川県立松陽高等学校 総括教諭)

(編集部注)

本記事は『三訂版 Listening Laboratory Standard β』をもとに書かれていますが、「四訂版」(→次ページ参照)においても基本的な構成に変更はございません。